

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531192

研究課題名(和文) 保育者養成・教員養成・現職教育における「声を育てる」教育プログラムの構築

研究課題名(英文) Construction of "Nurture the Voice" Education Program in Nursery Teachers Training, Teacher Training and Current Education

研究代表者

志民 一成 (Shitami, Kazunari)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：50320784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：研究・調査の成果をもとに、実習課題やディスカッション課題、ワークショップ形式など、「声を育てる」ことを考えるための実践的プログラムを開発した。また子どもの声の技能を引き出す具体的な教材の開発を行い、これらを統合し、歌唱に限定しない広範な表現ツールとしての声を磨き、表現力を培うための教育プログラムの構築を目指した。

研究成果の概要(英文)：Based on the results of research and investigation, we have developed practice tasks, discussion problems and workshops such as practical programs to think that "to nurture the voice". In addition, we have developed the specific teaching materials bring out the skills of children's voices. These was aimed at the construction of educational programs to nurture the voice as broad representation tool that does not limited to singing.

研究分野：音楽教育学

キーワード：声を育てる 歌唱 保育者養成 教員養成 現職教育 音楽教育 声の表現技能

## 1. 研究開始当初の背景

今日まで音楽科教育で行われてきた「声」にかかわる教育といえば、発声指導や合唱教育など、他に応用不可能な形での特定の技能の修得に限られてきたと言えよう。また、保育や小学校においては、歌で何を育てたいのか今一つ明確なビジョンが見えなかったり、そもそも子どもの声をどう育てていったら良いかということに関して、ほとんど関心が払われてこなかったりしたと言って良い。

しかし「生きる力」の原動力となるのは、なによりも「声」を通じた表現であり、声を介したコミュニケーションである。言語であったり、歌唱であったり、声による表現体系の形式や技能を学ぶ以前に、「声そのもの」を育てようとする視点が、我が国の教育に欠如してはいないだろうか。

また、幼児期において「声による表現」は、コミュニケーション力や想像力、身体感覚、そして感性の育成の根幹として極めて重要である。保育所保育指針や幼稚園教育要領に示された「表現」領域では、子どもの自己表現を保証し、それを出発点として表現を育てていく考え方が示唆されているものの、この理念が小学校以降の教育にどう連結し、受け継がれていくかの視点が、現段階においては十分焦点化されていない。幼児期における「表現の育ち」の基盤の上に、どうやって「声」の教育を形成していくのかは、これからの教育の重要な課題であろう。

実際、研究の分野においても、歌唱の音程や特定の発声技能の指導については数多くの研究の蓄積があるが、子どもの表現の根本的なツールである「声」を、いかに育てるかという視点での研究は、やっと途についたばかりと言える。

また、「声を育てる」という視点で教育を受けてこなかった学生たちにとっては、「声を育てる」ということはどういうことなのか、実際どう育てて良いのか、そして育てる上で自分はどのような知識と技能が必要なのかということが見えていないのは当然であろう。しかしながら、その要求に応えうる養成プログラムは未整備のままである。

しかし、歌唱に限定しない広範なツールとしての声を磨く、育てるということは、これからの我が国の教育において重要なキーワードになると考える。

## 2. 研究の目的

我々の掲げる「声を育てる」という概念は、歌唱での歌声に止まらず、人間の表現、そしてコミュニケーションの原動力としての声を、子ども自身が探求し自己のものとしていくこと、そして、それを保育者・教師が支え、共に表現者として成長するという、教育的な営み全体を包括したものである。

「声を育てる」ことによって、表現力やコミュニケーション力を高めることはもちろん、感性や身体感覚を磨き、想像力を培い、

さらには日本人としての感性を養うことへとつながることが期待できよう。

例えば、声で様々に表現するなかで、言葉の持つ語感や、音楽の表現する緊張と弛緩などのニュアンスを感じ取り、それが感性を豊かにすることにつながる。それは翻って、声の技能を磨き表現力を培う上でも不可欠である。また、自分の声と向き合い、試行錯誤し、探求するなかで身体感覚が磨かれる。そして、人とかかわる、伝え合う、見て聴いて感じ取ったものやイメージを人と分ちあうという、コミュニケーション全てに声がかかわっているが、そういった経験が土台となって想像力は養われる。

中学校の新学習指導要領では、「我が国の伝統的な歌唱」を取り扱う上で「言葉と音楽との関係」や「姿勢や身体の使い方」の重要性が強調されているが、言葉と音楽という声による表現に共通する音としてのニュアンスへの視点や、自分の身体に対して感覚を研ぎすませ、試行錯誤して自分の声を探求していく、我が国の伝統的な声による表現本来の在り方を尊重したものと捉えることができる。それは、まさに「声を育てる」ことを通して、日本人としての感性が養われることを期待したものと見えよう。

教育プログラムの対象は、保育者・教員を目指す学生および現職教員である。子どもの「声」を、歌唱に限定しない広範な表現ツールとして育てるために必要な知識、考え方、技能を身につけることが、教育プログラムの目的である。

教育プログラムには、以下の3つの内容が包含される。

(1) 偏狭な表現技能の習得ではなく、子ども自身がすでに持っている声の能力を引き出し、表現ツールとして磨くために何が必要かを考える視点が不可欠である。保育者や教員をみずく学生自身が行動し、試行錯誤し、体験し、思考し、知識を広げ、理解を深め、それらをつなぎ、「声を育てる」とはどういうことか、どう育てるのかということについて、自ら答えを追求していくことができるプログラムを構築する。

(2) 「子どもの声を育てる」という視点を持つだけでなく、自分の声に対する意識と理解を高め、自らの声も育てるプログラムとする。それにより、保育者・教員という表現者として必要な柔軟性に富む声を磨く。

(3) 「声を育てる」ための考え方、思考の仕方を学び、そこから保育における「表現」の意義や、音楽科教育で何を育てるのか、という教育課題についても考えを深める。

## 3. 研究の方法

本研究においては、以下の(1)～(6)の段階を経て進めた。

(1)「声を育てる」ことを考えるための知見の体系化

これまでの歌唱教育・発声教育に関する教育史的、発達学的、音声生理学的な、様々な基盤的研究を精査し、学生および現職教員に活用可能な知識として整理する。

(2)我が国や諸外国の音声表現に関する実践における課題の整理

教育現場での実践の調査を通して、我が国にとどまらず、諸外国の歌唱および声の表現教育の実態把握と問題点の整理を行う。具体的には、韓国とイタリア等の保育や歌唱指導についてフィールドワークと調査を行う。

(3)「声を育てる」ことを考えるための実践的プログラムの開発

(1)と(2)の成果をもとに、ディベート課題、ワークショップ形式、体験型プログラムなど、「声を育てる」ことを考えるための実践的プログラムを開発する。

(4)声の技能を引き出す具体的な教材の開発(平成24・25年度)

平成20～22年度に科学研究費補助金を受け実施した「幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発」の成果を応用しつつ、より応用範囲の広い、声の技能を引き出す具体的な教材の開発へと発展させる。

(5)声を磨き、表現力を培うための実践的プログラム(メソッド)の構築

(4)の成果を取り込み、歌唱に限定しない広範な表現ツールとしての声を磨き、表現力を培うための教育プログラムを構築した。具体的には、声を出す自分の身体感覚を磨き、評価する耳を育て、柔軟に表現できる身体を鍛え、伝える技能の精度を高めていくメソッドを目指す。

(6)「声を育てる」教育プログラムの実施と普及活動

保育者養成校や教員養成課程、現職教育の講座等で、(3)と(5)を統合した教育プログラムを試験的に実施する。さらに、教育プログラム普及のためのテキストの出版を目指す。

#### 4. 研究成果

(1)【研究・調査】「声を育てる」ことを考えるための知見の整理、諸外国の音声表現に関する実践の検討

これまでの歌唱教育・発声教育に関する教育史的、発達学的、音声生理学的な、様々な基盤的研究の整理を行い、それらを組み替え、学生および現職教員に活用可能な知識として体系化していくことを目指した。

また、教育現場での実践の調査を通して、我が国にとどまらず、諸外国の歌唱および声の表現教育の実態把握と問題点の整理を行うことを目的として、韓国およびイタリアの

保育や歌唱指導についてフィールドワークと調査を行った。

なお、【研究・調査】に関する研究の成果については、5. 主な発表論文等の〔図書〕に記載した研究成果報告書にまとめた。

(2)【教材開発】「声を育てる」ことを考えるための実践的プログラムの開発

研究・調査の成果をもとに、ディベート課題、ワークショップ形式、体験型プログラムなど、「声を育てる」ことを考えるための実践的プログラムを開発した。また、前回、科学研究費補助金の申請を受け実施した、「幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発」の成果を応用しつつ、より応用範囲が広く、汎用性のある声の技能を引き出す具体的な教材の開発を行い、これらを統合し、歌唱に限定しない広範な表現ツールとしての声を磨き、表現力を培うための教育プログラムの構築を目指した。具体的には、声を出す自分の身体感覚を磨き、評価する耳を育て、柔軟に表現できる身体を鍛え、伝える技能の精度を高めていくメソッドを志向した。

これらを統合した教育プログラムを、保育者養成校や教員養成課程の授業、および現職教育の講座等で実施した。また、これら教育プログラム普及のためのテキストの出版を目指している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

石川眞佐江・志民一成，韓国の保育における音楽活動の実際——ソウル市内の幼稚園の事例から——，静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)査読有，Vol. 46，2015，pp.59-75

中原雅彦・志民一成，イタリアにおける幼児・児童の歌唱活動に関する調査報告：フィレンツェ市の事例を中心に，熊本大学教育学部紀要，査読有，2014，Vol. 63，pp.213-219

志民一成・増田葉月，氣息性のある発声を改善するための歌唱指導法の検討～フラスラーの理論に基づいて～，静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)査読有，Vol. 45，2014，pp.177-189

国府華子，唱歌に付された強弱記号について—『学校音楽』(昭和8～16年)の分析を通して—，愛知教育大学研究報告(芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編)，査読有，Vol. 63，2014，pp.1-5

志民一成，子どもの「歌う技術」の育ちを考える，保育の実践と研究(スペース新社

保育研究室) 査読無, vol. 17 No. 2, 2012, pp. 48-51

〔学会発表〕(計7件)

志民一成「小・中学校における民謡の歌唱活動の効果と意義～コブシと唄声の音響分析からの検討～」日本音楽表現学会大会口頭発表、平成26年6月22日、帝塚山大学(奈良県奈良市)『日本音楽表現学会第12回大会要項』p.49

今川恭子・志民一成・村上康子・石川眞佐江・鹿倉由衣・丸山 慎「共同企画 パネルディスカッション 身体・モノ・音、それってアフォーダンス？」日本音楽教育学会第44回大会、平成25年10月13日、弘前大学(青森県弘前市)

国府華子・志民一成・早川倫子「唱歌に付された強弱記号の歴史的背景を辿る 『学校音楽』の分析を通して」日本音楽教育史学会第26回大会、平成25年5月11日、日本女子大学(東京都文京区)

志民一成「静岡大学における《声を育てる》音楽教育の研究と実践～地域と連携した伝統的な歌唱の実践を中心に～」日本音楽教育学会東海地区例会、平成25年3月23日、B-nest 静岡市産学交流センター(静岡県静岡市)

志民一成・国府華子・早川倫子「唱歌に付された強弱記号について 歴史的経緯を辿る」日本音楽教育学会第43回大会、平成24年10月7日、東京音楽大学(東京都豊島区)

今川恭子・嶋田由美・志民一成・大沼覚子・鹿倉由衣・中野圭祐「自主シンポジウム表現の育ちにおいて型や技術を学ぶことの意義」日本保育学会第65回大会、平成24年5月5日、東京家政大学(東京都北区)

志民一成・小佐川心子「幼児の多様な音声表現を引き出す試み 声の技能と教材を焦点に」日本保育学会第65回大会、平成24年5月4日、東京家政大学(東京都北区)

〔図書〕(計1件)

志民一成・国府華子・早川倫子・石川眞佐江・中原雅彦・増田葉月『平成24～平成26年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 保育者養成・教員養成・現職教育における「声を育てる」教育プログラムの構築』2015、60

〔その他〕

(1)「声を育てる」をコンセプトとした実践の実施  
足立区立おおやた子ども園(平成24年0月

26日、平成25年7月5日、平成26年1月20日、2月24日、7月7日、平成27年2月27日、東京都足立区)音楽ワークショップとミニ・コンサートを実施。

足立区立東栗原保育園(平成26年9月5日、東京都足立区)音楽ワークショップとミニ・コンサートを実施。

西新井保育園(平成26年6月27日、7月22日、東京都足立区)音楽ワークショップとミニ・コンサートを実施。

まどか幼稚園(平成24年6月～7月、平成25年5月20日、平成26年7月7日、東京都葛飾区)音楽ワークショップを実施。

太陽保育園(平成25年7月22日、10月21日、11月18日、平成26年2月7日、東京都足立区)音楽ワークショップとミニ・コンサートを実施。

足立区立元宿こども園(平成24年10月12日、東京都足立区)音楽ワークショップとミニ・コンサートを実施。

足立区立いりや第二保育園(平成24年6月25日、7月27日、10月29日、11月28日、東京都足立区)。音楽ワークショップとミニ・コンサートを実施。

(2)普及活動

富士市中学校音楽部夏季研修会講師(平成26年8月6日、吉原第三中学校)

日本赤ちゃん学会「音楽表現講座」(平成25年9月21日、10月26日、11月30日、聖心女子大学)(平成26年10月11日、11月15日、11月29日、甲南女子大学)

湖西市小・中学校音楽部夏季研修会講師(平成26年8月5日、新井中学校)

富士市小学校音楽部夏季研修会講師(平成26年8月1日、富士教育会館)

小笠教育研究協会音楽部一斉研究報告会における講師(平成24年11月、平成25年11月)

6. 研究組織

(1)研究代表者

志民 一成 (SHITAMI, Kazunari)  
静岡大学・教育学部・教授  
研究者番号: 50320784

(2)研究分担者

今川 恭子 (IMAGAWA, Kyoko)  
聖心女子大学・文学部・准教授  
研究者番号: 80389882

早川 倫子 (HAYAKAWA, Rinko)  
岡山大学・教育学部・准教授  
研究者番号： 60390241

石川 眞佐江 (ISHIKAWA, Masae)  
静岡大学・教育学部・准教授  
研究者番号： 80436691

国府 華子 (KOU, Hanako)  
愛知教育大学・准教授  
研究者番号： 70282811

(3)連携研究者

村上 康子 (MURAKAMI, Yasuko)  
共立女子大学・准教授

中原 雅彦 (NAKAHARA, Masahiko)  
熊本大学・教育学部・講師

増田 葉月 (MASUDA, Hazuki)  
静岡大学・教育学部教育学研究科音楽教育  
専修・修士課程